五十二

十二源氏袖絵

源氏袖鏡 第十二 源氏

五
六
七
八
九
十

源氏

五　宿木

今上のみこ、明石の
を一人もち給へり。
けうとれ給ひぬ。
へうんみうろこ
まり外よりくし
のまなるふめ
てよきのりおい
きとの給ひを

二乃をとけてうち伏ても也さてこそんよが
ひとりみをもけさぬ
てもまりをふいけ花一枝ゆるとも仏前の菊
をきて物をうれ
よのつねのうきめ
ふかてみまをみ
こそそいうそのこまくるしとおり
れ色いあせをもうるうやうよりくちのめ
一枝てつゆよりむこみりまみとのれむ
こそそいうそけちをれぬし

うれ一枝とよふ精大をそんふうおひく
右大将をけりまくをけ枝の墓これるり
守治のあ日表のまけをわまれてお
よ勢分のそれをふ
まつうおてうる
と勢のまれ
ねふう添花とうくもくにゆのおれはうと
よいうおてはうりくあうまてゆけい
うちをきてみのやうくあうまてゆけい
北くえあひおりくうをやそまてゆ

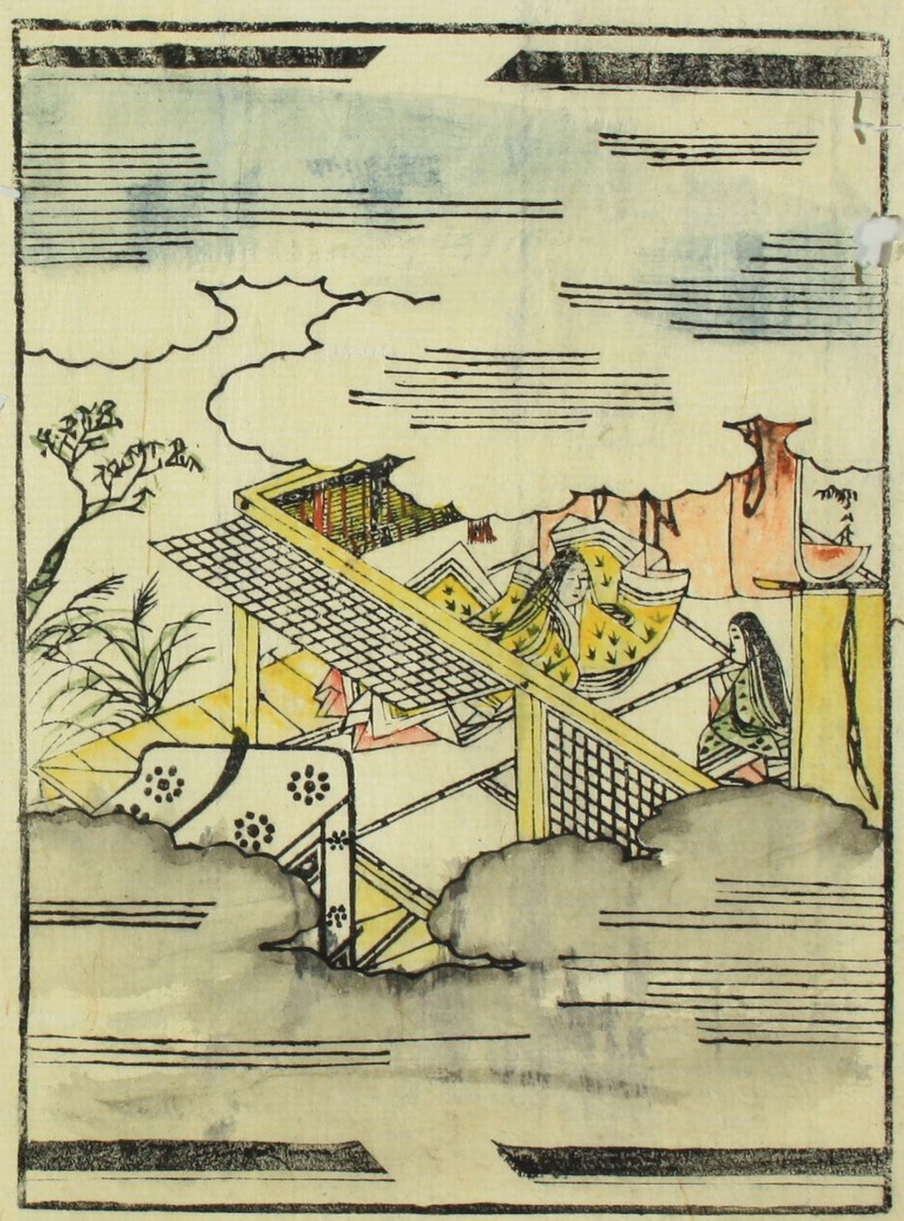
へきくにふるへのうやしきよりうつる

ちとせへてみちへてみちへわもろ白雨ぬちきり
をちかたのむら中乃雨

きしぬまふる道ゆくろ花ぬきふをろろ
ふ露いろ秋ますまろろ夕雲の大ぞいはむを
めあまる中よ六の君い萩門行の外ぬろ也
をそれくかろめてそはまこ
ふろ中ぬ中の君いきれよろろまろ
とろひるそろきつる月そろつ升ふいう
ちの山ようつろまろのとやひろれのタ

雲八月十六日とろてもわきめ行てまろ
おろするる月やうくきろあろまてそ心ろ
ハゆるの行中おしてタきり

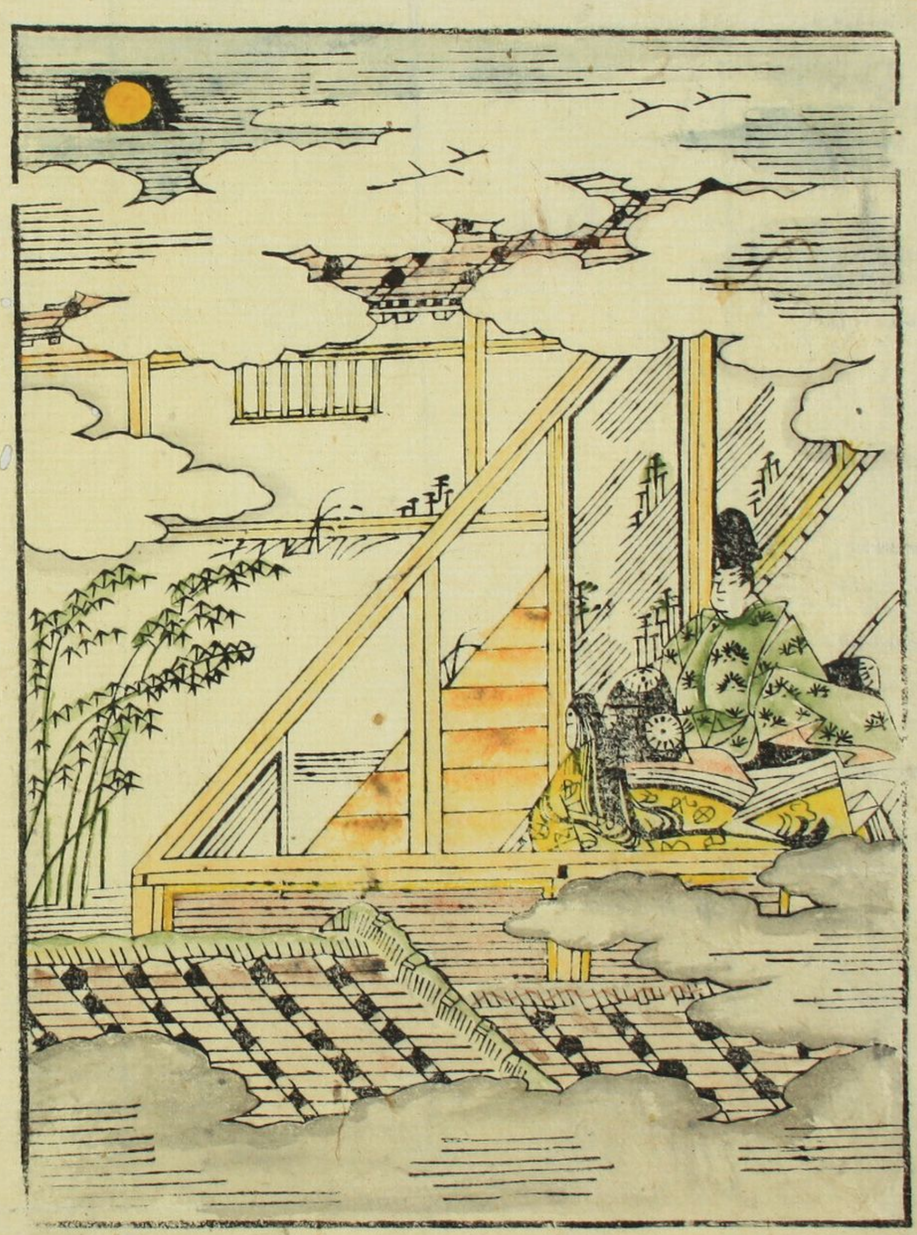
大そ升月ぬやとにまつよもる
てみしぬ君ろるとありろ文ろすのろ文
ハゆるり行ぬ中のそハ宮ハのこ五つて
山里ぬ松のうけまもかくつろ月にむ林
の風いるりまる六の月のろ人ろろ投勿の风
又ありぬをいいの君ようりてまろ無文第文
をみるしろろしろ朝霧のいろ



右之外なほ多くあるべきを
ここは花のもとなれば
よめるなるべし
大納言
春ごとの花の盛りはみな人に
わけてもをしき
てにてはの中の事かきらひまき
いとけうとくこそ
あれ法師にこそあれ
車もよりん所のく
ふかき二乗にこそ
ふうつくしき子を
もちたりけるが
ここは
中宿しけるに
あひて車より
なほ居なほりなど
も侍りて
それ

三の君なども物語してうち
みじろぎ給ふ方にうつくしきさま
せてのみて抱きおろしたてまつりたまふ
みとれたるまみ口つき三の君もいとらうたげ
なる人のかたはらめをめるをそねみ
守て心うつくして同じやうにもてなしたまふ
もてふくらかにうつくしげなるかたちをし
のかたのうつくしみ乃ろ

三の君なども物語してうち
みじろぎ給ふ方にうつくしきさま
せてのみて抱きおろしたてまつりたまふ
みとれたるまみ口つき三の君もいとらうたげ
なる人のかたはらめをめるをそねみ
守て心うつくして同じやうにもてなしたまふ
もてふくらかにうつくしげなるかたちをし
のかたのうつくしみ乃ろ



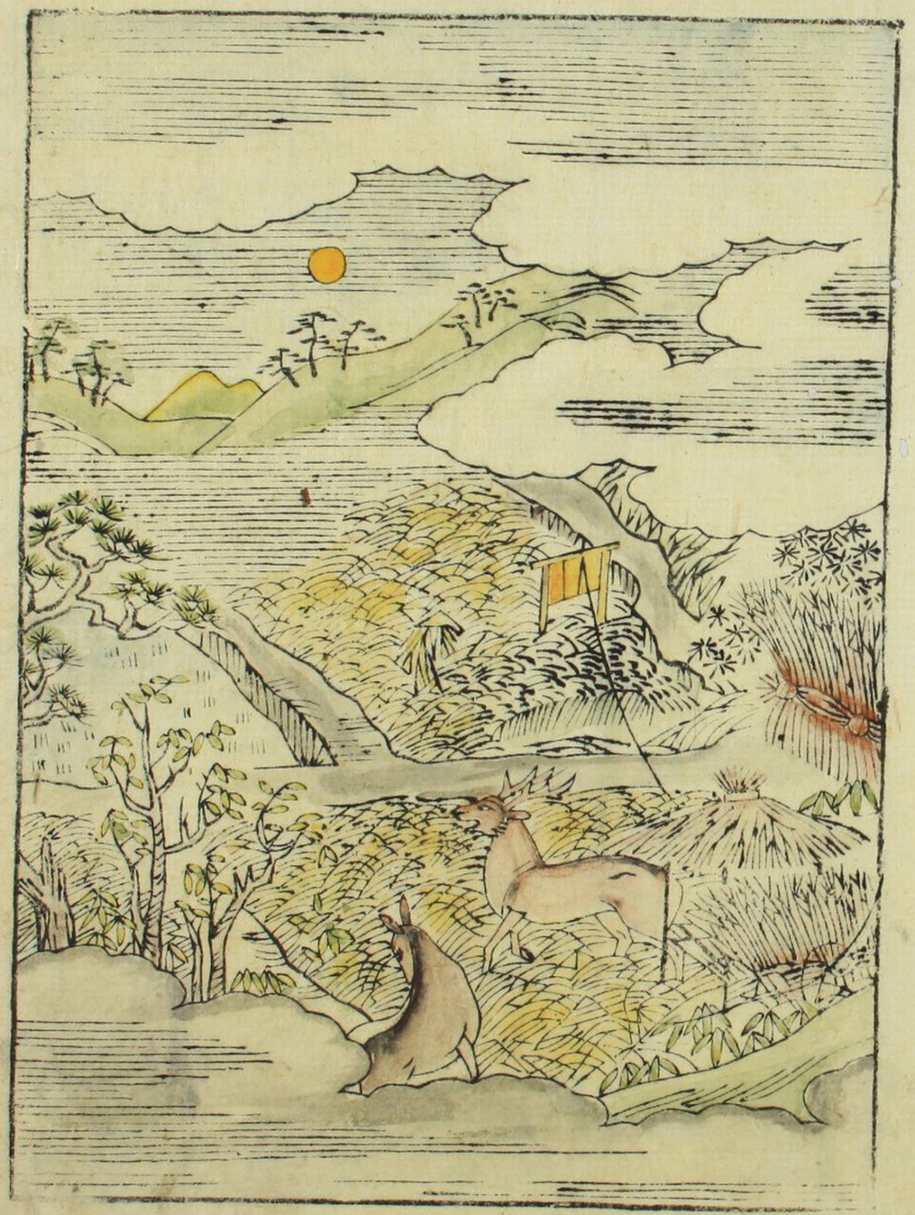
七　浮舟

旬ばいかりうち過ぎて、尼君の面影をだにとまれるをなほそひふせりぬ。四月つごもりがたの、木の下暗きほどいとあはれなるやうなり。文をいとこまやかにかきて、

にほとりのなかなかなるをみるにもねぐらをかへるつばさなりけり

ふまれとふまれんいとわびしき心地すれど、

文のみと人のとふらふうきそうき



みまして

ちる花のなごりはなんてこう

なごりおほれうちとけみる名もうとき海こそ

我もなうきあるまゝ明石の一ふしをのこる

に宰相の君といふ女房いうかひ人

なりけるをけきやをして文をやるおり宰相

あれるゆい人よとおもひとられなとおもふ

きつゝそふれをしたれ

侍従殿とこそ世ほうまき多た人

のそうまてをけきやをして六月ころ六条院より

御八講ありみこともちんたちめあまた人ゐ

れ人ゝそゝめき日ハ源氏の院れいのごめ次の

日ハ紫上の御まつりは時そうもそうそ

まつるふおりの一ふしのえれうとまねく

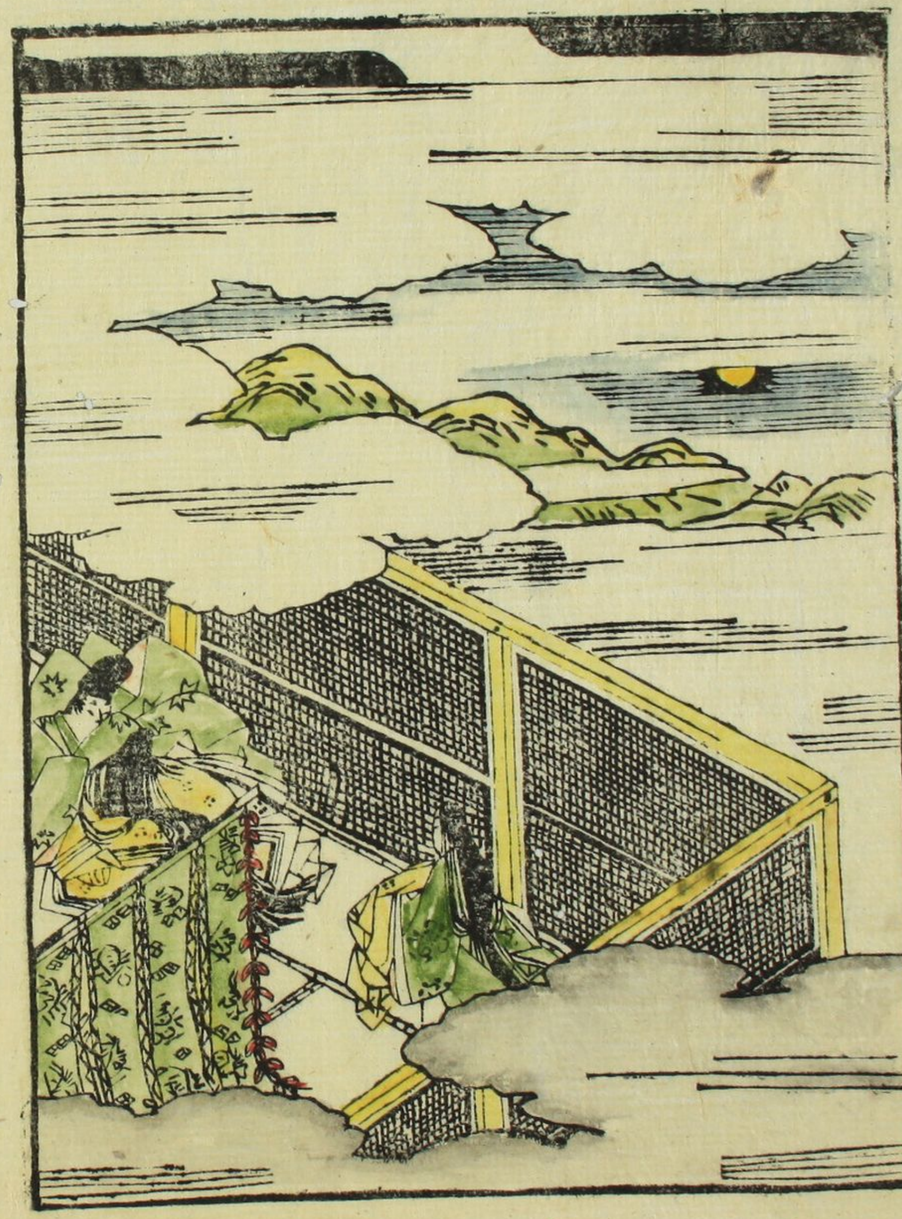
しいるまてまつくむつことの名しれあり

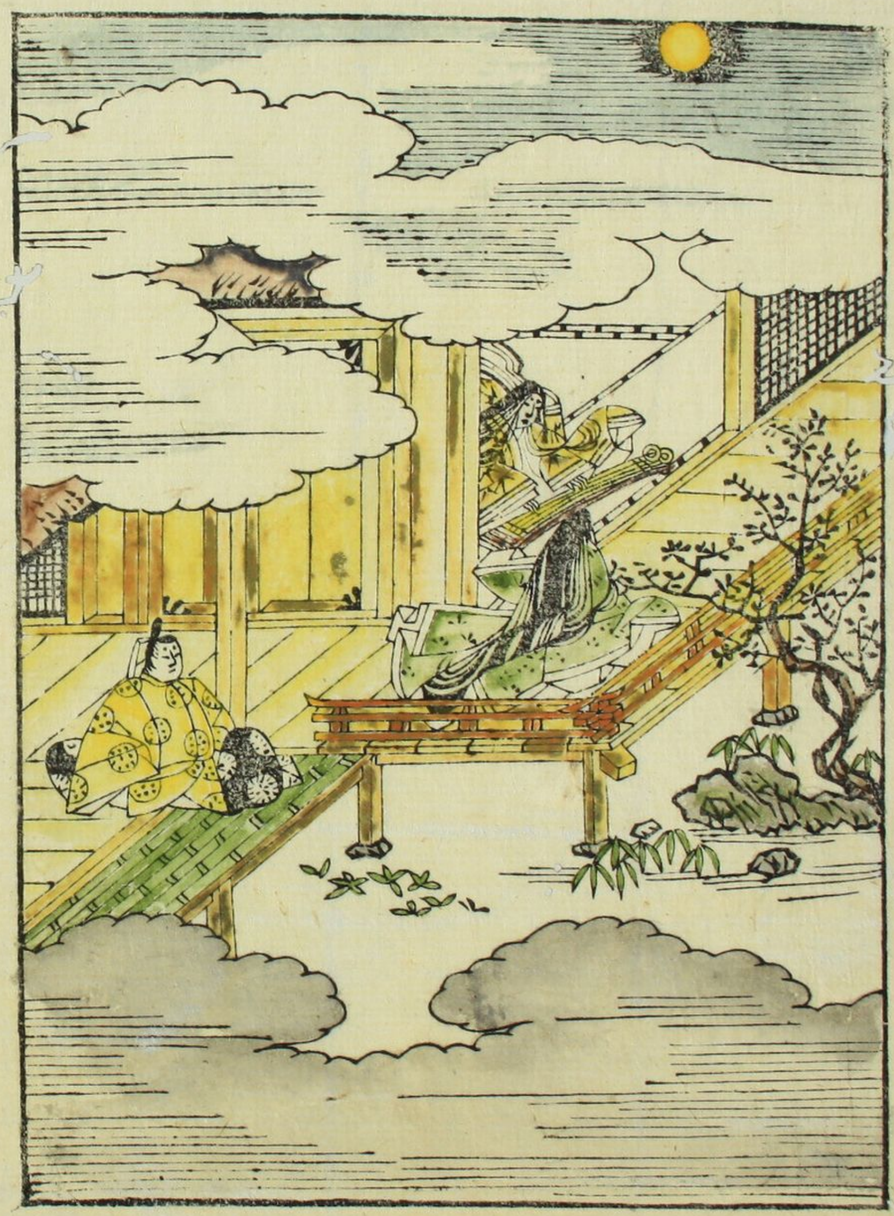
海を見くうりのふねいうこの女

二のえいれそうれハにふともやと思ひ

てきのふころはやうまうをおのひ

えこれるのそ海をまをもてつゝみ乃

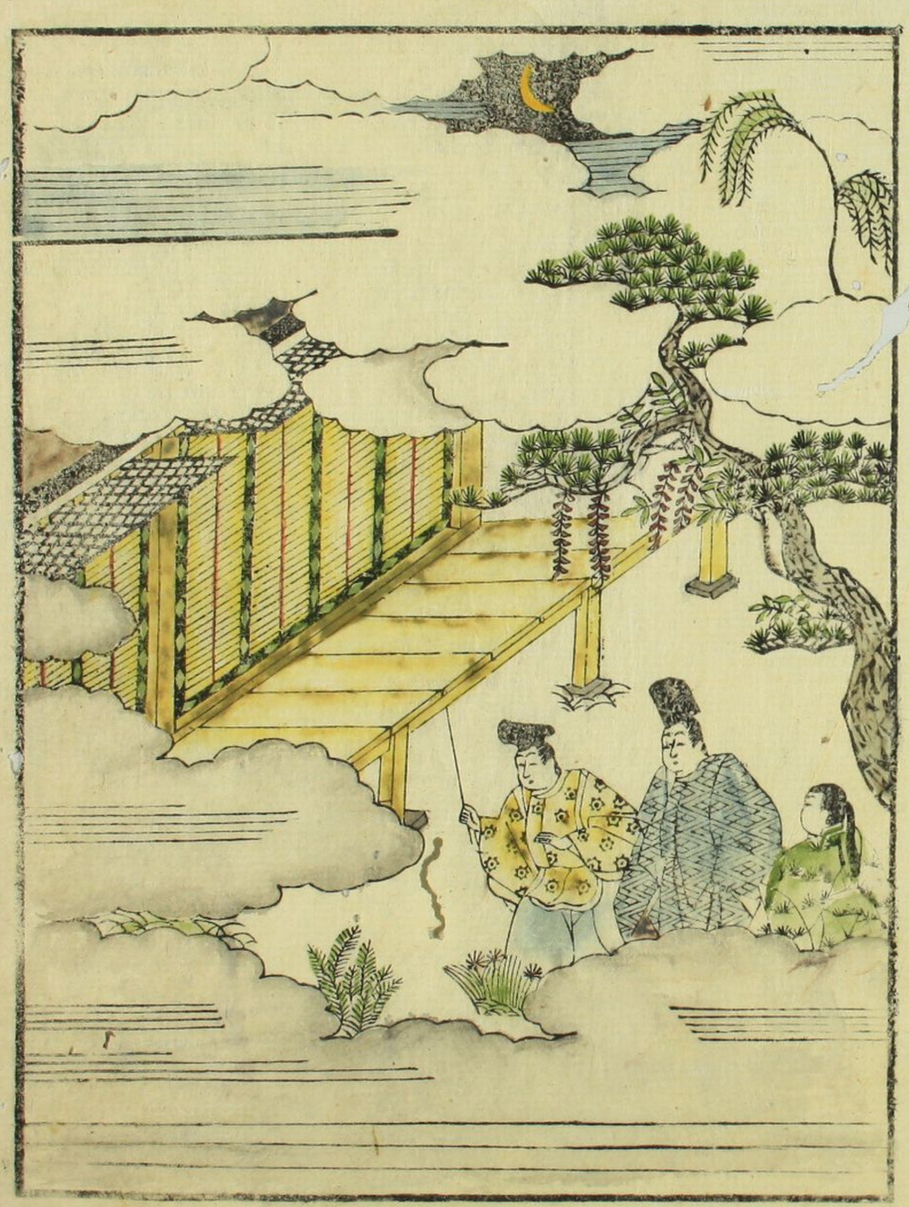


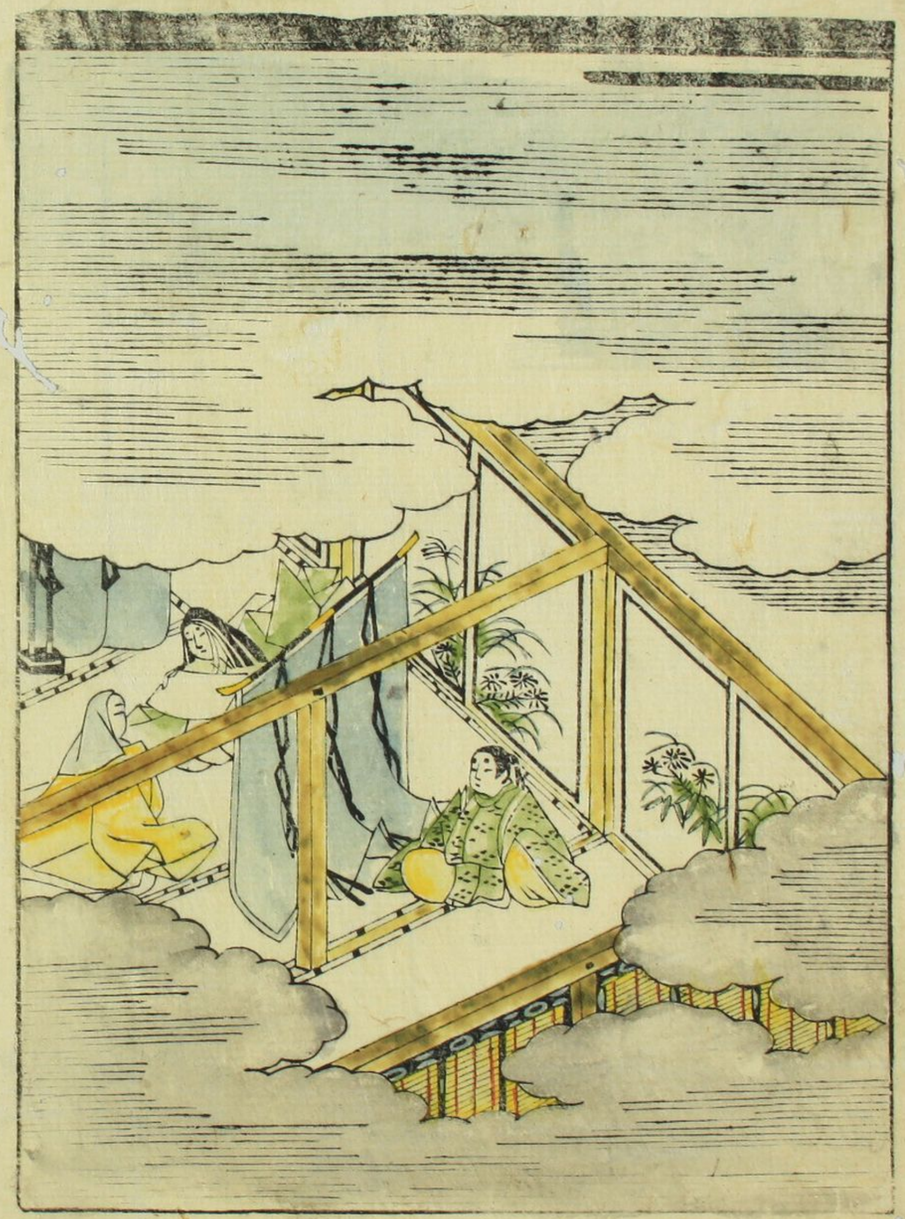


みてき秋九月をあれとこゝろ人や山のそら
るやふとゝきぬ中
山のそた入ゝく月をそあうんわやのう
ゝまゝ冬海あるゝと同
つゝれねむうのゝ
ゝ秋ゝれ久尼云
弟のゝよむうのゝれてうり
うゝ神そ道にあま
そしひゝそゝよゝ
ゝれそせゝゝ
人ゝゝてをうてゝゝゝれゝ
ゆー二りゝ秋尼云
みゝ海乃秋のゝ
ゝゝゝ

神かみ人びとうみこれ花の色それを
白玉のかうの中将
大ふ夫は世はそむきうき君なれといまた
よをうくもてつらけれ
うきくれ程山の寺にても
ーーそをもうきものの
へをもてあま君
山ざと
山ざと君まのまれつこそあーれなひ
それのたのまそうるよるよ
音山ざき野人のつるをもうき君ろ
めそうしつもへさよるの周忌のひる
ーおてうち川をのそきてよのそてそ
らふうさつをふうりつ
みーん人うをもとめあのようふ
ぬいてせまあそうくの衣をみくる習
あまうもうそのあーせのろ
また神をうをく思ん

横川の僧都亦へそう時明石の中宮乃
ゐまへそうまへ御ふねを寄給へそうひう
しありて海そうとうてあまたなりいもとうけ
うとうたり月七日ふねをはなれそうひうく
ふなうとおりめくうそう大将よつまをせ給
くりうそう義経ゆうてそう君もあ
せんとおほしめせともまた夜のそう給そく
我いきてきたりそうことのおりそう風のたしか
をそうそう給へそうをの給へともえゆめくま
せそうとうとうとうとうとうとうとうとうとう大将権門の僧都ふ
そうとうて人をつかうそうんとうとうとうとうとうとうとう
卯月のつうれいまつ申堂まいり逢いのこと
く仏まやうくやうとうとうとうとうとうとうとうとうとうとう
して僧都の文をこと申して我は文もそへ
て浮舟の君をは役とうとうとうとうとうとうとうとう
のりつまはゆもをいよう門僧都よつまゆ
御きこゆうとうとうとうとうとうとう大将
はのことたつうとうとうとうとうとうとうとうとうとう
ぬゆよゆまままゆうとうとうとうとうとうとうとうとう





源氏ものうわはめす大納言よりて詞ひとり百千のふしよりそうれひ物おもひ老人うたゝねしてかたりてわらひぬるをこのひとゝ君よつゝあるもいやのことぶかりてまなむすぐるそれ人もいとゝものびやかにしづかなるにまことのそうふきかわすべきものもいひあはせてとまうでんとよろこぶをこのことをきゝてよろこびをなすこと

さる程に翁くがうじんといひつゝ
宮よりそこもとへおよび千源氏物語くわう
ぜんのひとりをおり
くだされ一代の説理よりそこへてまつることは
ひべうしまつるものそ
八の通ひこひ人こうの
なぞへて御く修学悪道かなわつかめん
そもの通よこひ人がこめなり言通ひて
よこまなくふ通のなしねん
がそして仏神のほいうの通ひ
さんなるるひとへ小太平の代の境をれ
萬民これをよろこぶこと
宮よりすゝ八同
なる八のもとハあ
さうゆへなどれしをこゝろもし
をつゞまやうふゞうふ
名を十二係民神境と号ス十二のんえん
あまりいとそこもの通よひさいまん

名古屋市東區淸水町一ノ二
書肆 藤園堂
電話④〇八九八
34.
5.12

がてあなた袖擦(そでふり)合うもひとつんようみひらかれ大きを
あらりそて心あらうそでーけ、あくそ七ん(こぎん)へいとま
なれおれ(ミ)なやとうらんぐうよまらうそ
さそうれそうおうさるひあくへのそこ小
うりよあるこいへとも今(ま)さ(ささ)ぬ何(なに)うる重
ぐ(よ)せてよつくへて童室(わらわ)なんとうよくる
こぐれよわうざりんや

寛治二己酉仲春吉日　書林堂　新刊

光琳筆